



孤児 *The Orphan*
(1980) ロバート・ストールマン(宇佐川晶子訳) 早川書房(文庫)
(5/31刊・¥380)

アメリカ田舎青春小説風。いろんな見方はあるだろうが、SFのレッテルで出版されることは、やや内容が異質だ。雰囲気は若干ステイーヴン・キング——どこがというと、詳細な日常描写が似ている。ただし、ホラーに結び付かないところが異なる。

人間に変身する能力を持つ、野獣がいた。既存のどの生き物とも違って、そいつは高い知性と狂暴な力を備えていた。しかし、ひとたび人間に変身してしまうと、独立の個性、人間の個性が生まれ、自走をはじめる。三部作の第一部では、五歳の子供と、十二歳の少年の二つの人生が描かれる。舞台は、アメリカ中西部。三〇年代の風俗は、著者の体験を反映して現実感にあふれている。子供と少年、ごくあたり前に流れていくように見えた二人の人生は、獣の本性のために破綻する。なんだ、ただの青春小説か、と思うかどうか。実際、本書の評価は、この辺りの特徴に左右されるだろう。三部作ではあるけれど、本書だけを独立に読んでも、完結して楽しめる。